

平成三十一年歌会始御製御歌及び詠進歌

光

御製

贈られしひまはりの種は生え揃ひ葉を広げゆく初夏の光に

皇后陛下御歌

今しばし生きなむと思ふ寂光に園そのの薔薇さうびのみな美しく

皇太子殿下

雲間よりさしたる光に導かれわれ登りゆく金峰きんぶの峰に

皇太子妃殿下

大君と母宮の愛でし御園みその生の白樺はくば冴ゆる朝の光に

文仁親王殿下

山腹の洞穴どうけつ深く父宮が指したる先に光苔見つ

文仁親王妃紀子殿下

日の入いらむ水平線の輝きを緑閃光グリーンフラッシュと知る父島の浜に

眞子内親王殿下

日系の百十年の歴史へて笑顔光らせ若人わかうと語る

佳子内親王殿下

訪れし冬のリーズの雲光り思ひ出さるるふるさとの空

正仁親王妃華子殿下

つかの間に光る稲妻さ庭辺の樹木の緑を照らしいだし来く

寛仁親王妃信子殿下

被災者の苦勞話を聴きにける七歳ななさいが光れる一語を放つ

彬子女王殿下

らふそくの光が頼りと友の言ふ北の大地を思ひ夜更けぬ

憲仁親王妃久子殿下

窓べより光のバトンの射し込みて受くるわれらのひと日始まる

承子女王殿下

朝光あさかげにかがやく御苑みそのの雪景色一人と一匹足跡つづく

御 製

贈られしひまはりの種は生え揃ひ葉を広げゆく初夏の光に

平成十七年に阪神・淡路大震災十周年追悼式典のため兵庫県に行幸啓になった折、御懇談になった遺族代表の少女から両陛下に「はるかかのひまわり」の種子が贈られました。両陛下はこの種を御所のお庭にお播きになり、翌年以降も毎年、花の咲いた後の種を採り育て続けてこられました。御製は、このヒマワリが成長していく様をお詠みになったものです。

(注) 「はるかかのひまわり」は、阪神・淡路大震災で犠牲になった当時小学校六年生の加藤はるかさんの自宅跡地にその夏に咲いたヒマワリで、地元の人々が鎮魂と復興の象徴にと、種子を取って各地に広げたもの。

皇后陛下御歌

今しばし生きなむと思ふ寂光に園の薔薇のみな美しく

高齢となられ時にお心の弱まれる中、一夕、御所のバラ園の花が、寂光に照らされ、一輪一輪浮かび上がるように美しく咲いている様をご覧になり、深い平安に包まれ、今しばらく自分も残された日々を大切に生きていこうと思われた静かな喜びのひと時をお詠みになっています。

皇太子殿下

雲間よりさしたる光に導かれわれ登りゆく金峰の峰に

皇太子殿下には、高校一年生でいらつしやつた昭和五十年七月に、山梨県と長野県の県境にある金峰山にお登りになりました。当日は曇りでしたが、時々日がさす天候でした。この御歌は、そのような中、山頂付近で、さしてくる光に導かれるように歩みを進められたときの御印象を思い出されつつお詠みになられたものです。

皇太子妃殿下

大君と母宮の愛でし御園生の白樺冴ゆる朝の光に

天皇皇后両陛下が昭和時代をお過ごしになり、現在は皇太子同妃両殿下がお住まいの東宮御所のお庭には、両陛下が慈しまれ、大切に育てられた、皇后陛下のお印の白樺の木立がございます。この御歌は、そのような白樺の木々が、朝の光をうけて白く輝いている様子を、この美しいお庭の景色を御覧になりながら二十数年間過ごしてこられたことへの感謝のお気持ちを含めて、お詠みになられたものです。

山腹の洞穴深く父宮が指したる先に光苔見つ

文仁親王殿下

秋篠宮殿下は、かなり以前のことになりますが、夏にご家族で、浅間山の側にある石尊山によく登られていました。山腹に洞穴があり、その中を天皇陛下が指をさされて「光苔があるよ」とお教えになりました。今までに見たことがない、光っている苔に大層驚かれた光景をこの歌にお詠みになりました。

文仁親王妃紀子殿下

日の入らむ水平線の輝きを緑閃光と知る父島の浜に

秋篠宮妃殿下は、一昨年の夏、悠仁親王殿下とご一緒に、小笠原村の父島と母島をご訪問になりました。島の人に誘われて浜辺にいらしたとき、水平線に沈む夕日が、一瞬きれいな緑色に輝く光景をご覧になり、この輝きを「グリーンフラッシュ」と呼ぶことを島の人からお聞きになりました。その思い出を歌にお詠みになりました。

日系の百十年の歴史へて笑顔光らせ若人語る

眞子内親王殿下

眞子内親王殿下は、昨年、日本人の移住百十周年にあたり、ブラジル国をご訪問になりました。五つの州、十四の都市を訪れる中で、日系の若者が自分の先祖や日本への思い、将来の夢、仕事や活動について、生き生きと話すのをお聴きになる機会があり、その時の印象を歌にお詠みになりました。

佳子内親王殿下

訪れし冬のリーズの雲光り思ひ出さるるふるさとの空

佳子内親王殿下は、一昨年の九月から昨年の六月まで、英国のリーズ大学にご留学になりました。ご滞在中の冬、リーズの曇り空が光り、懐かしい東京の空を思い出されたことを歌にお詠みになりました。

正仁親王妃華子殿下

つかの間に光る稲妻さ庭辺の樹木の緑を照らしいだし来

寛仁親王妃信子殿下

被災者の苦労話を聴きにける七歳ななさいが光れる一語を放つ

寛仁親王妃殿下には、東日本大震災後よりご自身で被災者の方々からの電話相談をお受けになっています。また、現在では平成二十八年に発生した熊本地震で被災された方々からの電話相談もボランティアでお受けになっています。

妃殿下ご自身が、被災された方々の厳しい気持ちをお受けになる中で、数少ないが「光が見えた」「明るい気持ちになれた」との声を聴かれることもあり、電話相談を受けさせていただくことを継続される中で、力を頂き、継続の意味をかみ締められて詠まれたお歌でございます。

彬子女王殿下

らふそくの光が頼りと友の言ふ北の大地を思ひ夜更けぬ

北海道胆振東部地震が発生した際、北海道在住のご友人達に安否確認をされる中、届いたご友人からの一報を受け、安堵どしながらも落ち着かぬ夜を過ごされた折のことをお詠みになったものです。

憲仁親王妃久子殿下

窓べより光のバトンの射し込みて受くるわれらのひと日始まる

朝、カーテンの隙間から射さし込む一筋の光をバトンに見立てられ、御譲位の年であることにも思いを馳はせながら、それぞれにバトンが受け継がれていく人生のリレーをイメージなさって詠まれたものです。

承子女王殿下

朝光あさかげにかがやく御苑みそのの雪景色一人と一匹足跡つづく

大雪の翌朝、愛犬と散歩に出られたときの情景を詠まれたものです。

召人 鷹羽狩行
ひと雨の降りたるのちに風出でて一色いっしょくに光る並木通りは

召人控 栗木京子
言葉には羽あり羽の根元には光のありと思ひつつ語る

選者 篠 弘
手づからに刈られし陸稻をかぼの強こはき根を語らせたまふ眼差し光る

選者 三枝昂之
歳歳さいさいを歩みつづけて拓く地になほ新しき光あるべし

選者 永田和宏
白梅にさし添ふ光を詠みし人われのひと世を領してぞひとは

選者 今野寿美
ひとたびといふともかげりおびてのち光さすとはいひけるものを

選者 内藤 明
日の光人の灯ともしに移りゆく川浴ひの道海まで歩む

選 歌 (詠進者生年月日順)

高知県 奥宮武男
土佐の海ぐいぐい撓ふ竿跳ねてそらに一本釣りの鰹が光る

山梨県 石原義澄
剪定の濟みし葡萄の棚ごとに樹液光りて春めぐり来ぬ

福島県 逸見征勝
湿原に雲の切れ間は移りきて光りふくらむわたすげの絮

奈良県 荒木紀子

大の字の交点にまづ点火され光の奔る五山送り火

栃木県 大貫春江

分離機より光りて落ちる蜂蜜を指にからめて濃度確かむ

岡山県 秋山美恵子

光てふ名を持つ男の人生を千年のちの生徒に語る

福岡県 瀬戸口真澄

ぎりぎりに光落とせる会場にポストン帰りの春信を観る

岡山県 重藤洋子

無言になり原爆資料館を出できたる生徒を夏の光に放つ

秋田県 鈴木 仁

風光る相馬の海に高々と息を合はせて風車を組めり

山梨県 加賀爪あみ

ペンライトの光の海に飛び込んで私は波の一つのしぶき

佳 作 (詠進者生年月日順)

大分県 富永美江子

つぎつぎに棚田うるほし落つる水夜目に光りて農事はじまる

神奈川県 安見 潤

津波より七年の津に言伝ことづつの葉を流すたび水は光りぬ

岡山県 大滝英治

水稻の光合成を記すグラフ下がり始めて夏果てにけり

群馬県 菊間光子

やはらかき光の中に眠りゐる親子となりしばかりのふたり

長野県 乾 百樹

冬の日の光もとめて研ぎ上げぬ鉋の刃先の凍らぬうちを

福島県 藤田好子

縄文のビーナスの胸に今もなほ小く煌く雲母の光

愛媛県 園部 淳

日溜まりで暫し泳いでせきれいは飛び立つ時に光を落とす

千葉県 釘田高生

密やかなカミオカンデの微睡まどろみにチェレンコフ光宙より降りる

東京都 谷本千絵

天窓の光かすかに父照らすそつと呼吸を確かめてみる

広島県 山本美和

グーにした拳を少し緩めればいちばん小さな光が見える

静岡県 井上佳保

光る竹たぶん私はわからないな変へたくないし今の関係

新潟県 豊嶋彩花

左手のマニキュア落とす除光液香らせ姉は大人になつてく

新潟県 山田涼風

くるくると右手でラケット回す時ガットに一瞬夏が光つた